

取扱ふ場合に述べようと思ふが、要するに依頼性に強く屈從に甘ずる女子の自覺を促したものである。

第五の教育的獨立とは、男女各自ら進んで知識を開き徳性を涵養すること。即ち自己教育、自己修養のことである。修身要領第十二條には、この事を次のやうに述べてをる。「獨立自尊の人たるを期するには、男女共に成人の後にても自ら學問を勉め、知識を開發し徳性を備養するの心掛を怠るべからず。」

第六の國家的獨立とは日本國民が男女を問はず獨立自尊の人となり、やがては日本をして世界の舞臺に於ける獨立自尊の國たらしめることである。學問のすすめこの事を「外國に對して我國を守らんに自由獨立の氣風を全國に充滿せしめ、國中の人々貴賤上下の別なく其を自分の身の上に引受け智者も愚者も目くらも目あきも各其人たるの分を盡さざるべからず。」と述べてをる。

要するに以上の六方面を其の内容とする獨立自尊の人物を作ることが彼の教育の目的であつた。

4、教育方法論 A、教育と遺傳及び環境 教育は人の知徳を發達させるやうに思はれるが、實は其の發達を助長するに過ぎない。教育の根底には遺傳と環境との二つの力が働いてゐる。即ち祖先から遺傳された能力と、生家の家風及び社會の公議輿論の二大勢力が働いてゐるのである。それで單に教育のみによつて人物を陶冶しようとするのは、恰も空氣太陽土壤の如何を問はずして、單に肥料だけ

で植物を成育させようとする如きであると言つてゐる。氏は人物陶冶を遺傳・環境・教育の三基礎に立つものと見て、教育の制限を正しく認識してゐた。徳育如何といふ論文に次の様に述べてゐる。

人の智徳は教育に由て大に發達すと雖も、唯其發達を助くるのみにして其の智徳の根本を資する所は祖先遺傳の能力と其生家の家風と其の社會の公議輿論とにあり。蝦夷人の子を養ふて何程に教育するも其子一代にては逆も第一流の大學者たるべからず、源家八幡太郎の子孫に武人の夥しきも能力遺傳の實證と見るべし。又武家の子を商人の家に貰ふて養へば自ら町人根性となり、商家の子を文人の家に養へば自ら文に志す、幼少の時より手に付けたるものなれば血統に非ざるも、自然に養父母の氣象を承るは普く人の知る所にして、家風の人心を變化すること有力なるものと言ふべし。

俚諺に曰く門前の小僧習はぬ經をよむと、蓋し寺院の傍に遊戯する小童輩は自然に佛法に慣れて其の臭氣を帯るとの義ならん、即ち佛の風に當れば佛に化し、儒の風に當れば儒に化す、周圍の空氣に感じて一般の公議輿論に化せらるるの勢は之を留めんとして駐むべからず、如何なる獨立強行の士人と雖も此の間に獨するを得ざるは、傳染病の地方に居て之を免かるるの術なきが如し。(福澤全

集卷五徳育如何)

B、家庭教育と習慣 教育には一人の教育と一國の教育とがある。一人の教育とは親が其の子を教育すること即ち家庭教育である。一國の教育とは世の中の事を憂慮する有志が、世間一般の有様を察し

て教育の大意方向を定めて後進の少年を導く教育であつて、即ち學校教育がそれに當る。

家庭教育に於ては其の子を一人前の男女となし、社會に役立つところの自分等の後繼者たらしむべきである。故に父母たるものは勞を憚らず財を惜まず、その子の性質をよく考へて持ち前の能力を絶頂まで發揮させねばならぬ。つまり其の子を天下第一流の人物、第一流の學者たらしめることを目的とせねばならぬ。斯かる考へで家庭教育をするについて最も大切なことは習慣の教育である。「教るよりも習ひ」といふ諺のあるやうに、習慣の力は教授の力よりも強大なものである。而して子供の習慣は父母の模範によるものであるから、父母たるものは大いに心しなければならぬ。家庭は習慣の學校であり、父母は習慣の教師である。そしてこの習慣の學校は教授の學校よりも更に有力なものである。家庭教育と習慣について「教育の事」と題する論文には次の様に述べてゐる。實に名文章である。

父母の職分は子を生んで之に衣食を與ふるのみにては未だ其半をも盡したるものに非ず、之を生み之を養ひ之を教へて一人前の男女と爲し、二代目の世に於て世間有用の人物たるべき用意を爲し、老少交代してこそ始て人の父母たるの名義に恥ることなきを得べきなり。

故に子を教るが爲には勞を憚るべからず、財を愛しむ可からず、よく其の子の性質を察して之を教へ之を導き人力の及ぶ所丈けは心身の發生を助けて、其天稟に備へたる頂上に達せしめざる可からず、概して云へば父母の子を教育する目的は、其の子を天下第一流の人物、第一流の學者たらしめ

んとするに在る可きなり。

教るよりも習ひと云ふ諺あり、蓋し習慣の力は教授の力よりも強大なるものなりとの趣意ならん、子生れて家に在り、其日夜見習ふ所のものは父母の行狀一般の家風より外ならず、一家の風は父母の心を以て成るものなれば、子供の習慣は全く父母の一心に依頼するものと云て可なり、故に一家は習慣の學校なり、父母は習慣の教師なり、而して此の習慣の學校は、教授の學校よりも更に有力にして實效を奏する事極めて切實なるものなり、今この教師たる父母が子供と共に一家内に眠食して果して恥るものなきか、余輩これを保證すること能はず、前夜の酒宴深更に及で今朝の眠八時を過ぎ床の中より子供を呼び起して學校に行くを促すも子供はその深切に感ずることなかるべし云々。

(岩波文庫福澤選集三四二頁)

C、學校教育と實學 學校教育は習慣の學校とも見るべき家庭教育の後を引受けるところの教授の學校であるから、學校教育だけでは立派な人物を陶冶することが出来ない。心ない親は學校に子供を入れておけば、人間になる様に思ふてゐるが、それは大なる誤りであつて、學校はいらぬ子供のすてどころといふ敷がある。もうと親たるものは子供の教育について心を勞さなければならぬ。

又學校は實生活に疎い教育をやつてをるから、數學は出來ても店先の簿記を心得ず、作文誦誦はうまいが日常の手紙が書けず、物理の書物は讀んだが實際の設計は出來ず、化學は學んだが甘酒の作り

方も豆腐の製法も知らないと言ふ工合である。斯くの如く説いて一方家庭の教への不行届と、學校教師の不深切とを歎じ、この缺點を救済すべく設立されたものが實利を標榜しか慶應義塾である。

5、女子教育論 女子教育に關する意見は『女大學評論』及び『新女大學』によつて窺ふことが出来る。前者は徳川時代に於て婦人の寶典として取扱はれた女大學が、あまりに非理不法なりとして、一々之に論駁を加へ、男尊女卑の陋習を一掃せんとしたものであり、後者は新時代の婦人心得を詳説して、婦人の獨立自尊を強調したものである。女子教育論は後者を見る方が便利である。これによつて女子教育思想を簡単にのべておく。

婦人の嫁振は仲々大役であるから、夫たるものは大事にしなければならぬ。子供が生れたら實母の乳で育てるべきである。女兒は少し成長したならば男兒と同様體育に氣をつけねばならぬ。美しい着物をきせて運動を妨ぐる様なことはよくない。少し成長すれば文字を教へ、針を教へ手紙の文句雙講盤も授け、世帯萬端にならさねばならぬ。學問は男女によつて相違あるべきでない。特に女子には經濟的思想と、法律的思想が缺けてをるから、これを教へてやらねば女子は男子と併行が出来ない。しかし女子は優美を貴ぶものだから男書生の様に朴訥遠慮であつてはならない。そして男子と違つて音楽は勿論・茶の湯・挿花・歌・俳諧等の遊藝も許す限り修むべきである。其の他結婚論等に亘つて詳細に説かれてゐるがそれは略する。

四、明治教育に及ぼせる影響

實利主義 第一の影響はその實利主義・實學主義の學風が一世を風靡したことである。徳川時代末期から明治初年にかけては、人文主義への反動として實利主義が芽を出しはじめたのであるが、それには肥料と培養とが必要であつた。この肥料の役を務めたのが當時紹介された米國の實學的な教育思想であり、巧なる培養者が福澤氏その人であつた。氏の學問のすすめは實利主義の鼓吹であり、慶應義塾の教育はその實行であつたのである。かくて實利主義・實學主義は明治十年頃までの教育界を支配して、恰も十七世紀に於ける歐洲の教育界の如き觀を現出したのである。

經濟思想の鼓吹 儒教主義の教育と歐米の文明とを比較して見るとき、吾等の持つ缺點は經濟的數理の考に乏しい事と、獨立心なきことであると氣付いた氏は、一面獨立自尊を説くと共に他面經濟的數理の思想を鼓吹した。日本が西洋文明國と伍して行くには、先づ經濟的日本の建設を完成せねばならぬと考へたのである。そして從來町人と卑まれる風習を打破すべく自ら町人を以て任じたのである。これによつて町人自らの自覺を促し、有爲の人材が町人たる事を甘んじ、續々經濟界に活躍するに至つたのである。明治大正に於ける我經濟界の巨頭は悉く福澤門下の出身であることを見ても如何に偉大な影響を與へてをるかがわかるであらう。

新文明の輸入

明治初年に於て西洋新文明の移入功績者を擧げるなら、先づ第一に指を氏に屈した

ければならぬ。氏は三回に亘る歐米巡視によつて彼の國の新文明を移入した。其の著「帳合の法」は簿記法を移入した最初のものであり、「窮理圖解」は物理学を、「洋兵明鑑」及び「雷銃操法」は兵學を「世界國盡」は地理をそれぞれ紹介したものである。就中「西洋事情」發行部數も廿五萬部を算し、維新政府の六輯三略としたもので、多くの新政令もこれによつて出されたといふことである。當時の歐化主義熱は氏の新文明輸入運動に伴ふて生じた變態現象であると言へ、日本文明の指導者たりし其の功績は歿してはならないのである。

私立學校の發達 慶應義塾の創立は現今私立學校の嚆矢をなすものであり、其の門に幾多の大人物を輩出せしめ、國家に寄與せる點亦多大なるものがあるのである。氏は私立學校の發達上決して忘れてならない恩人である。

其他其の獨立的學風、女子教育意見等も直接間接明治教育に影響した點が多いのである。

〔問題〕

一、福澤諭吉の思想が明治時代の教育に及ぼせる影響を述べよ。(昭四本)

第二 伊 澤 修 二

一、小傳 嘉永四年信濃國伊那郡高遠に生れた。父は文谷と號し畫をよくした。幼時から聰慧で、

藩校道徳館に入りて國語及び漢文を學んだ。そして貢進生に選ばれて大學南校に入り卒業した。明治七年には愛知縣師範學校長に任ぜられ、翌八年には師範學校取調の爲、慶應の高嶺秀夫氏、並に同人社の神津專三郎氏と共に、文部省より米國に派遣を命ぜられた。氏はホレリス・マンの建てたブリツヂウオーターの師範學校に入學した。十年に卒業してハーヴァード大學に入學したが、父の病に遇つて明治十年に歸朝し、東京師範學校長兼體操傳習所主幹に任ぜられた。其の後音樂取調掛長として我國の音樂教育に盡したり、文部省書記官をつとめたり、文部省編輯局長となり我國最初の國定讀本の編纂に従事したりした。そして文部省參事官に轉じ、東京音樂學校長と東京盲啞學校長を兼任した。しばらく休職してゐたが明治二十八年臺灣總督府の學務局長を命ぜられ、新領土の教育について畫策する所が多かつた。三十年には貴族院議員に勅選せられ、三十二年には東京高等師範學校長に任ぜられ、校則を改正し校舍改築の計を成したが、病の爲にその成果を見ないで辭職した。病氣恢復後感ずる所あつて吃音矯正を志し、小石川に樂石社を起して、畢世の力を之に傾けた。大正六年病歿した。其の功により從四位勳二等に叙せられた。著書には「教授眞法」「教育學」「學校管理法」「吃音矯正の原理と實際」などがある。

二、功績 氏は明治時代に於ける有數の教育家で、後世に大なる功績を残されてゐるが、其の第一の功績は吃音矯正の事業である。氏は大病の恢復後五十三歳を一轉機として吃音矯正に全力を傾けた

のである。樂石社の創設と共に樂石叢誌を發行して事業を擴めた。創立五十周年即ち氏の歿する年までに、吃音矯正を受けた者の数は五三六七人の多數に上つてゐる。

第二の功績は師範教育の改善についてである。米國より歸朝した後は、彼の地での研究及び經驗に基いて、東京師範學校の教則及び諸規則を改正して全く面目を改めた。又後年東京高等師範學校長となつたときにも、校則の改正、校舎の改築等に盡力を重ねた。これ等の點に於て師範教育の發達上の大なる功勞者と言へるのである。

第三の功績は教育書の著述である。氏の著教育學は邦人の手になつた最初の教育書で、心理學的知識に基いて論ぜられたものであり、引例の如きは多く東洋に於ける事項を取つてをるので、頗る理解し易く、當時（明治十五年）としては極めて新鮮な學說であつたのである。従つて熱狂的な歡迎を受け、教育界に與へた影響も頗る大なるものがあつたのである。その他音楽教育、國語教育等に與へた影響も尠くなかつた。

第二 高嶺 秀夫

一、小傳 氏は安政元年八月會津若松に生れた。父を忠亮といひ母をキノといふ。氏はその長男である。八歳のとき藩學日新館に入り秀才を以て聞えた。十四歳で卒業し、翌明治元年十五歳で藩主松

平容保公の小姓となり側勤の役を勤めた。若松城籠城の際は城中に勤めてゐたので、開城後謹慎を命ぜられ、東京出向後松平圖書與頭舊邸内に閉居の身となつた。これから福地源一郎の私塾日新舎、箕作秋坪の三又學舎等に學び、最後に福澤諭吉の三田慶應塾に學び、學力優秀の故を以て同塾の教員に拔擢せられ、明治八年まで英學の教授を擔當した。明治八年氏が二十二歳のとき、師範學校取調の爲伊澤修二氏等と共に米國留學を命ぜられた。米國ではニューヨーク州のオスウエゴ師範學校に入學し、校長シエルドンの下でクルージに接し、ペスタロッチの教育思想を知つた。クルージの父はペスタロッチの門下生であり、オスウエゴ運動 Oswego Movement で知られたペスタロッチ主義の中心地であつたのである。明治十一年歸朝、東京師範學校及び東京帝大に教鞭を取つた。明治十四年には東京師範學校長兼教諭となつた。十九年には山川浩氏が校長になつたので氏は教頭となり、廿三年には東京高等師範學校教授に任ぜられ、次いで校長に任ぜられた。三十年には女子高等師範學校長に轉任し、文科・理科・技藝科の三分科制度を採用し生徒の素養を深からしめた。三十七年には東京音楽學校長を兼任した。明治四十三年五十七歳で歿した。功勞により従三位勳二等に叙せられ旭日重光章を授けられた。著書中「教育新論」は最も有名である。

二、功績 第一の功績はペスタロッチの教育法を我國に移入したことである。氏の留學したオスウエゴ師範學校は米國に於けるペスタロッチ運動の中心地であつた。そこで歸朝後ペスタロッチの教

育法を宣傳したのである。それで東京師範學校が我國のベスタロッチ運動の中必となつたわけである。當時同校教諭の若林虎三郎氏と同校訓導の白井毅氏との共著改正教授術はベスタロッチ主義の教授法を説いたものであつて、當時の教育界に非常な影響を與へたものであるが、その背後には高嶺氏の指導があつたのである。その序文にも高嶺氏がベスタロッチ的な開發抽出を強調してゐる。かくて明治十年から二十年に至る我が教育界は開發主義全盛の時代であつた、主知主義の教育界を風靡したことは、恰も歐洲十八世紀の如き觀がある。とに角ベスタロッチの教育説を我國に移入した恩人として高嶺氏は大なる功績をもつてゐる。

第二の功績は師範學校の改善發達に努力した事である。氏は米國より歸朝して後東京師範學校にあつて、校長伊澤修二氏と共に諸種の改良改善に盡力された。其の後高等師範及び女子高等師範の校長になつたときも、誠心誠意改善に努力されてゐる。

第三の功績は「教育新論」の著である。同書は明治十八年の出版で、ジョホノット氏の教育學を忠實に翻譯したものである。これは伊澤氏の「教育學」に次で大に世に行はれ、數年間は師範學校の教科書として全國的使用されてゐた。そして學校教師であつて本書を讀まない者は殆どないといふ様であつた。これによつて同書が教育界に如何に影響を與へたかがわかるのである。

第四節 勢榮

一、小傳 氏は幕臣能勢泰助氏の次男で、嘉永五年七月東京本郷の自邸に生れた。少年時代には漢學を修めた。幕末の際は朽木縣宇都宮近傍に轉戦してゐる。王政復古後は横濱の商店の小僧となつて餘暇に英學を勉強してゐた。布哇の領事ヴァンリド氏と知合になり、氏の歸國の際隨行を許され、一切の所有品を賣り拂つて旅費に充て米國に渡つた。丁度明治三年で氏が十九の歳であつた。オレゴン州のトラチン中學に苦學し、更に同洲のパシヒック大學に入り理學を修め、バチエラー・オブ・サイエンスの學位を得て明治九年に歸朝した。そして岡山縣師範學校兼中學校教導、學習院教師を経て長野縣師範學校長に補せられ、次いで福島縣師範學校長に轉じ、到る處に於て教育の勃興を促してゐる。明治二十年には文部書記官に任ぜられ、後東京女學校教頭兼幹事に任ぜられたが間もなく休職となり、其の後は著述に従事した。明治二十四年にパシヒック大學よりマスター・オブ・アーツの學位を贈られた。明治二十八年十二月病氣で歿した。僅か四十二歳の壯齡で長逝したのは惜しむに餘りあることである。氏は實に立志傳中の人である。著書には「内外教育史」「學校管理術」「根氏教授論」「根氏心理學」「虞氏應用教育論」「萊因氏教育學」「新教育學」等がある。

二、教育思想 氏の教育思想を見るに最も都合のよいものは新教育學である。本書は邦人の手にな

れる翻譯ならざる教育學の最初の勞作である。その序文に明治時代の教育思想の三遷について述べてゐる。これは氏の思想を知るに至極都合がよいのである。氏によれば其の第一期は米國風の時代でペイジやノルセント行はれたときである。米國風の教育説は學校の管理とか兒童の取扱ひなどは懇切だが、教育目的方法の原理に缺けてゐる。それで第二期は英國風の時代となつた。スペンサーやジョホノット（米國人であるが英國的思想）の著書が行はれた時代である。英國の學風は目的方法は系統的だが、自然科學に重き置き智力の開發を強調しすぎる。日本は自然科學の知識が幼稚であつたから、この英國學風に喝采を拍して非常な流行を極めた。そこでその反動として德育を重んずる獨乙學風が第三期に日本に來た。コンペレーやヘルバルトやラインの説が行はれるやうになつたのである。つまり日本の教育學風は三變遷を遂げたといふのである。

以上の三變遷は必然の理由によるものである。而して既に教育勅語が下賜されて我國教育の歸趨は定まつてゐる。だから今後は單なる翻譯書や偏つた説に依頼することなく、批判的な立場から取るべきは取り捨つべきは捨て、公平なる教育學と組織せねばならぬといふてをる。斯くて從來の教育説の長所を綜合して、知・徳・體の三育主義を主張したものが氏の新教育學の思想である。

三、功績 氏の最大なる功績は批判的立場から、自己の教育説を組織した點である。氏以前に諸種の教育學書は行はれたけれど、何れも翻譯的のものに過ぎなかつた。然るに氏によつて初めて我國人

の教育學が出來上つたのである。吉田熊次博士の如きも、氏を目して日本に於ける教育學の學者の元祖だと稱されてゐられる。

結 論

維新以後の教育が西洋教育思想の輸入であるとは、多くの教育史家から聞かされる言葉である。なる程第一期の創業時代に普通教育思想が高まつた事は歐洲に於ける第十六世紀の宗教改革時代を想起せしめ、第二期の學制時代に米國流の教育思想が紹介せられ實利主義・自然主義の勃興を見たことは、第十七世紀に於けるラトケ・コメニウス等の實學主義・自然主義の時代を思はせるに十分である。又第三期の教育令時代に前期の實利主義とベスタロツチの開發主義の教授法が結合して、主知主義が全盛を極めた事は、第十八世紀の啓蒙時代に髣髴たるものがある。次の第四期即ち學校令時代にヘルバルトの教育説が全盛を極めた事は、恰も第十九世紀のヘルバルト全盛時代に一致するものがある。なほ第五期の國民自覺時代に社會的教育學説が主張された事も、歐洲十九世紀末と似通うてゐる。斯くて第六期の大正昭和時代の教育は歐米諸國の現代教育と全く足並を描ふるに至つたのである。要するに歐洲の教育が五百年を要して辿つた道程を、我國は僅々五十年の短日月に突破したわけである。斯かる事實を根據として、從來多くの人々は維新以後の教育を歐米の教育の模倣移入だと見るやう

であるが、それは早計な結論である。何となれば斯かる思想の推移變遷は、單なる模倣によるものでなく、深い内面的な必然的な要求によるものだからである。然らばその内面的な必然的な要求の主體は何であらうか。それは神代の昔から我國民の中に一貫してをるところの根本的な信念であり思想であり精神であつて、その中心をなすものを隨神道（オホミチノミチ）といふ。太古の教育は純粹にこれに基いて行はれたのである。奈良時代になつて儒教佛教が傳へられたので、上古の教育は神道・儒教・佛教の混交せる思想によつて行はれたと見てよい。かうしてゐる間に儒教佛教の精髓は隨神道に融合統一されて、眞の日本精神となつた。この日本精神は平安時代に至つて文藝方面に向ひ、そこに獨特の日本的文藝が現れた。けれどもこの文藝は單に貴族階級に限られてゐた。従つて中古の教育は文藝中心で而かも特權階級の一部に限られてゐたと言ふ事が出來よう。鎌倉時代になると、此の日本精神は武士階級の道德となつて現れた。これが所謂武士道である。この中世の教育は道德中心であつて、教育の對象が社會の中流階級にまで擴大されたことを示してゐる。更に徳川時代になると、この日本精神が學問の方向に現れて來た。そして一般庶民が學問に親む様になつたから、近世の教育は學問が中心で、一般の庶民が教育を受けるやうになつて來たのである。之を要するに教育内容は文藝より道德へそして學問へと推移し、教育對象は貴族より武士へ、そして庶民へと歩を運んで來たと見ることができるのである。表解すれば次のやうになる。

(時代)

(教育内容)

(教育對象)

- 1、中古(平安時代)……………文藝……………貴族
- 2、中世(鎌倉時代)……………道德……………武士
- 3、近世(徳川時代)……………學問……………庶民

これにはつて次の時代たる最近世の教育は、文藝・道德・學問を總括した所謂文化を内容とし、貴族・武士・庶民を抱括した所謂國民を對象とするであらう事は、決して豫想に難くないであらう。この豫想の如く實に最近世の教育は、維新以前の教育を繼承發展せる國民文化の教育であつたのである。吾人が維新以後の教育は單なる歐米教育の模倣焼直しにあらずして、維新以前の我國教育精神の内面的な必然的な發展であると斷言したのは、斯かる理由に基くのである。維新以後に於て歐米の教育思想を可なり移入してゐるのは事實であるが、それは我國固有の日本精神をよりよく發展させるが爲の手段にすぎなかつたのである。歐米教育思想の單なる模倣であつたならば、新日本は決して今日の如く創造されなかつたであらう。

最近日本教育史の研究は學界の興味を引いて、専門的研究者が續々と現れた。そして或人は教育思想の方面より、或人は教育制度の方面より、維新以後の教育が維新以前の教育の延長であり發展であり、單なる歐米の模倣にあらざる事を發表してをる。まだ残された問題が多くあるにもせよ、我國の

教育が、古今三千年に亘つて終始一貫してゐることは、疑ふべくもない事實である。

日本教育思想史 (終)

定 價 一 個 月 分 五 十 錢 (増大號不定) 送料一錢五厘 半 年 分 六 冊 三 圓 (増大號一回合) 送料不 要 壹 年 分 三 冊 六 圓 (増大號二回合) 送料不 要		廣 告 料 一 頁 ◎一等四十四圓 ◎二等三十圓 ◎一等四十四圓 ◎二等二十圓	◎◎◎◎◎ 本 社 へ 直 接 の 御 注 文 (半年分以上前金に願ひます。 前 金 切 の 時 包 装 金 (前金切) と 捺 印 し ます。 送 金 本 社 の 振 替 貯 金 口 座 へ 御 拂 込 み 下 さい。 ◎◎◎◎◎ 領 金 各 校 必 要 の 向 向 書 式 調 製 の 上 申 込 ん で 下 さい。 ◎◎◎◎◎ 其 他 各 校 必 要 の 向 向 書 式 調 製 の 上 申 込 ん で 下 さい。

昭和五年三月廿五日印刷
 昭和五年四月一日發行

不 許 製 不 轉 載

編 輯 所 大 日 本 學 術 協 會
 東京市小石川竹早町三七
 發 行 所 毛 十 又
 發 行 者 尼 子 止
 編 者 甲 斐 元 太 郎
 印 刷 所 會 社 豐 州 社
 印 刷 者 會 社 豐 州 社

發售

第十

八

圖書

東京市小塚川竹里調三士
大日本學海會

新書

甲 會
甲 豐
甲 元
甲 大
甲 頂

編輯
編輯
編輯

期

第一卷第四十回 第三卷二十回

圖書

第一卷第四十回 第三卷二十回

發售

圖書



